

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年7月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万598トン、前年同月比100.4%、価格は1キログラム当たり271円、同107.6%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万6488トン、前年同月比102.5%、価格は1キログラム当たり244円、同108.4%となった。
- 9月は、8月の夏休み期間の比較的落ち着いた需要に区切りがつき、8月の盆前まで潤沢であった果菜類の出荷が減少すれば、価格高騰の場面も想定され、全体の価格は平年を上回ると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、北日本では、低気圧や前線の影響を受けにくく、まとまった雨の降った日が少なかったため、旬降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。旬間日照時間は、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。東日本では、梅雨前線の影響で曇りや雨の日もあったが、太平洋側を中心に高気圧に覆われ晴れた日もあったため、旬間日照時間は東日本太平洋側で多かった。また西日本では、期間を通して梅雨前線の影響を受けやすく、線状降水帯が発生して記録的な大雨となった所もあり、10日には福岡県と大分県に大雨特別警報が発表されるなど、各地で河川の氾濫や土砂災害が発生した。旬降水量は、西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。旬平均気温は、北・東日本では暖かい空気が流れ込みやすかったため、北日本でかなり高く、東日本で高かった。

中旬は、北日本では、日本海側を中心に前線や気圧の谷の影響を受けやすかったため、曇りや雨の日が多く、東北北部を中心に記録的な大雨となり、河川の氾濫や低地の浸水、土砂災害が発生した所があった。このため、旬降水量は北日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側で多かった。また、旬間日照時間は、北日本日本海側でかなり少なかった。東・西日本では、

日本海側は、梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、東日本では、線状降水帯が発生して記録的な大雨となった所もあったため、旬降水量は、東日本日本海側で多かった。一方、太平洋側は高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬間日照時間は、東・西日本太平洋側で多く、旬降水量は、東・西日本太平洋側で少なかった。中国地方、近畿地方、東海地方では、20日ごろに梅雨明けしたと見られる。旬平均気温は、北日本を中心に暖かい空気が流れ込みやすく、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美を中心に太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多く、暖かい空気に覆われやすかったため、北・東日本でかなり高く、西日本と沖縄・奄美で高かった。

下旬は、北日本では、期間の前半は高気圧に覆われ晴れた日が多かったため、旬間日照時間は、北日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側で多かった。また、旬降水量は北日本太平洋側でかなり少なく、北日本日本海側で少なかった。東・西日本では、太平洋高気圧に覆われ晴れた日が多かったため、旬間日照時間は、東日本日本海側と東日本太平洋側でかなり多く、西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。旬間日照時間平年比は東日本日本海側で187%、東日本太平洋側で175%となり、それぞれ1961年の統計開始以降で7月下旬とし

て1位の多照となった。また、旬降水量は、東日本日本海側と東日本太平洋側でかなり少なく、西日本日本海側と西日本太平洋側で少なかった。四国地方と北陸地方では21日ごろ、関東甲信地方と東北南部、東北北部では22日ごろ、九州南部では23日ごろ、九州北部地方では25日ごろに梅雨明けしたと見られる。旬平均気温は、太平洋高気圧が日本付近に張り出し、

暖かい空気に覆われたため、北・東日本でかなり高く、西日本と沖縄・奄美で高かった。旬平均気温平年差は、北日本では+3.9℃で、1946年の統計開始以降で7月下旬として1位の高温となった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本									
東日本									
西日本									

資料：気象庁「7月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万598トン、前年同月比100.4%、価格は1キログラム当たり271円、同107.6%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(7月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,598	100.4	94.6	271	107.6	104.5	273	272	268
だいこん	7,170	115.1	97.2	92	65.8	86.9	111	84	83
にんじん	5,129	98.5	87.9	146	86.8	91.7	142	147	150
はくさい	5,444	91.5	80.3	74	120.3	102.2	73	73	77
キャベツ類	15,191	92.0	91.9	97	124.4	115.4	103	103	87
ほうれんそう	830	105.0	93.4	640	100.6	102.6	553	648	758
ねぎ	3,429	106.0	99.6	335	91.4	89.3	351	361	299
レタス類	9,625	100.2	104.7	124	116.1	89.0	120	126	126
きゅうり	7,056	104.5	99.1	297	108.0	98.1	306	291	295
なす	3,606	106.5	108.4	359	111.2	95.2	373	377	332
トマト	6,647	95.4	89.0	374	113.5	113.2	356	382	381
ピーマン	2,076	105.4	106.0	497	119.3	107.6	577	492	430
さといも	102	69.3	66.0	594	175.2	134.5	751	606	481
ばれいしょ	4,032	94.5	83.3	175	178.9	108.9	173	180	171
たまねぎ	8,154	108.1	89.5	123	75.5	103.9	116	124	130

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんが中旬以降価格を下げ、高めに推移した前年を3割以上下回り、平年を1割以上下回った(図2)。

葉茎菜類は、ほうれんそうの価格が、数量の減少に伴い徐々に上がり、前年、平年ともわずかに上回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が中旬以降底上がり

し、前年、平年とも1割以上上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が、長崎産、静岡県産の残量が少なかったことから月間を通して堅調に推移し、大幅な安値で推移した前年を8割近く上回り、平年を1割近く上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

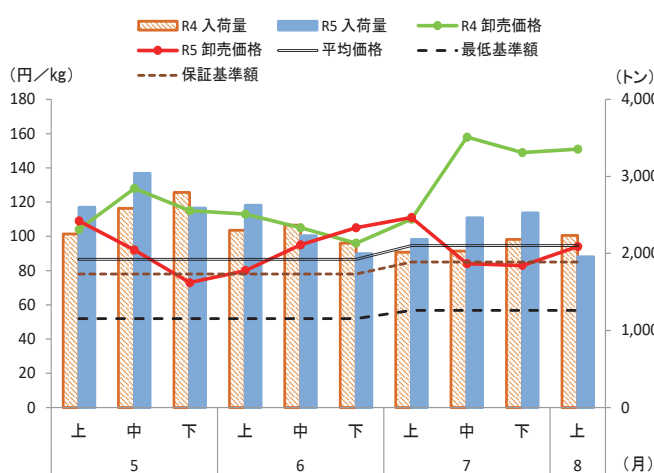


図3 ほうれんそうの入荷量と卸売価格の推移

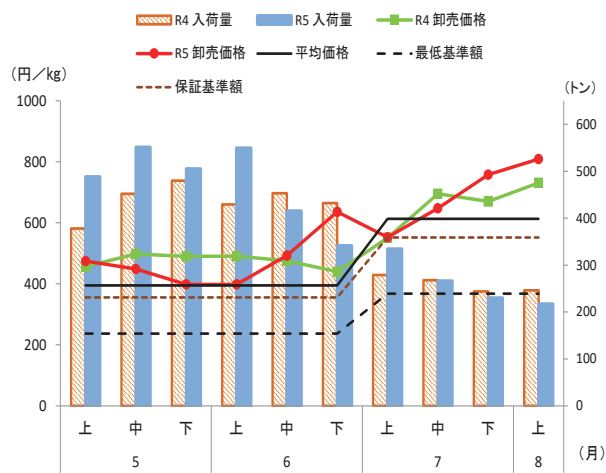


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

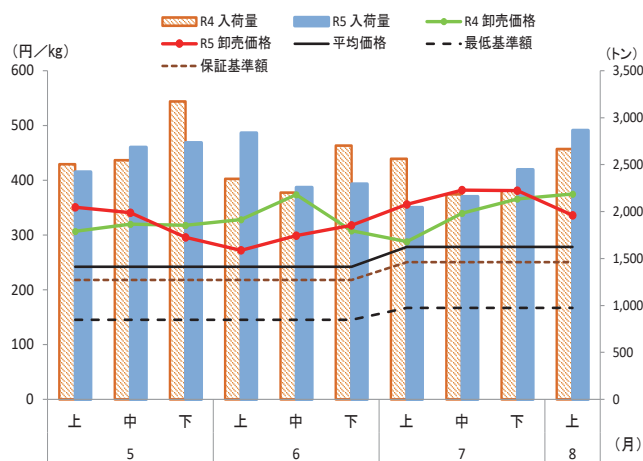
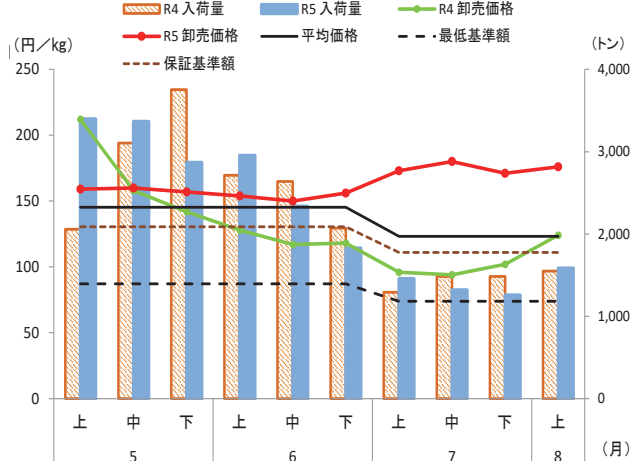


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、高温により生育は順調で、やや前進傾向であった。青森産の作付面積は前年並みで、一部軟腐病が散見されるものの、生育はおおむね順調。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。 中旬以降価格を下げ、高めに推移した前年を3割以上下回り、平年を1割以上下回った。
	にんじん 	青森産を中心に北海道産の入荷があった。青森産の作付面積は前年並みで、消雪が早く播種もほぼ順調に進み、その後の適度な降雨と気温の上昇により生育は前年並みからやや前進傾向となった。北海道産の作付面積は前年並みで、5月にやや干ばつ傾向となり、その後の降雨で回復するも、やや低温と日照不足の影響により生育が停滞した。総入荷量は少なめに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。 価格は北海道産の出荷が落ち着いた下旬に向けて上がったものの、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、全体としては好天に恵まれ肥大も良好だが、局地的な多雨が散見された。総入荷量は少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割弱下回った。 価格は月間を通して大きな動きは出ず、安めに推移した前年を2割強上回り、平年をわずかに上回った。
	キャベツ類 	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、5月上旬の降霜により生育の停滞が見られたものの、適度な降雨に恵まれ生育は順調であった。一部産地に病害が散見されるが影響はない。総入荷量は前年並みであった前年を1割近く下回った。 価格は下旬に落ち着いたものの、やや安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。
	ほうれんそう 	群馬産、栃木産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや下回り、高冷地中心に生育はおおむね順調も、高温と降雨にばらつきがあるため圃場によって差が見られる。栃木産の作付面積は前年並みで、高冷地中心に生育は順調であった。病虫害も少ないが、高温により生育が停滞している圃場あり。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は数量の減少に伴い徐々に上がり、前年、平年ともわずかに上回った。
	ねぎ 	茨城産を中心に千葉産、後続の東北産、北海道産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、6月の高温と多雨により生育は前進し、病虫害が散見されている。千葉産の作付面積は前年並みで、高温により前進した。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調でやや前進した。東北産の作付面積は前年並みで、一部5月の低温により生育が停滞した地域もあったが、その後の気温の上昇と適度な降雨により回復した。一部豪雨の影響を受けたものの、大きな影響はない。病虫害が散見されている地域もある。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、気温の上昇と降雨による品質低下が顕著であったことと、給食需要などがなくなった影響もあり、下旬に下がり、前年を1割近く下回り、平年を1割強下回った。
	レタス類 	長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、気温が高いため肥大もよく順調だが、局所的な多雨が散見された。群馬産の作付面積は前年をやや下回り、天候に恵まれ生育は前進した。総入荷量はやや多かった前年並みとなり平年をやや上回った。 価格は業務用需要の回復基調から、月間を通して安定した動きとなり、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年を1割以上下回った。
果菜類	きゅうり 	福島産を中心に岩手産、秋田産などの東北産の入荷があった。福島産の作付面積は前年並みで、5月下旬の干ばつの影響はあったものの、その後の定期的な降雨により生育はおおむね順調であった。岩手産の作付面積は前年並みで、生育は前年並みであった。秋田産の作付面積は前年並みで、定植時期の低温により活着が遅れたが、その後好天に恵まれ前年並みまで回復している。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 価格は安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。
	なす 	群馬産を中心に栃木産、茨城産など関東産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、一部地域で降雹の被害があったが、大きな影響はなくおおむね順調であった。栃木産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調も、虫害が散見される。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、6月の高温と適度な降雨により、生育は前進傾向となった。総入荷量は前年、平年をかなりの程度上回った。 価格は、関東産の増量に伴い下旬に下がり、安かった前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。
	トマト 	北海道産を中心に青森産、岩手産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。青森産の作付面積は前年並みで、一部圃場で尻腐れ（果実の先端の傷み）の発生がみられるものの、生育はおおむね順調であった。岩手産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。総入荷量は少なめに推移した前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。 価格は中旬以降、底上がりし、前年、平年とも1割以上上回った。

	 ピーマン	<p>茨城産を中心に岩手産、福島産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、病害の発生が散見された。岩手産の作付面積は前年並みで、生育は順調でほぼ前年並みとなった。福島産の作付面積は前年をやや下回り、6月以降の気温が高めに推移したことから順調であった。総入荷量は前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は東北産の数量がまとまった下旬に向けて下がったものの、安めに推移した前年を2割近く上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
土物類	 さといも	<p>宮崎産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、度重なる豪雨の影響が大きく、九州産全体的に数量は少ない。輸入の中国産はほとんど入荷がない。総入荷量は少なかった前年を3割強下回り、平年を3割以上下回った。</p> <p>絶対数不足から、価格は安めに推移した前年を7割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>茨城産を中心に静岡産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、3月の高温により生育は前進となった。6月の降雨による傷み、腐れが散見された。静岡産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と好天に恵まれて生育は順調で、7月下旬までにほぼ出荷は終了した。後続の北海道産は、気温の上昇に伴いやや早まっている。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は長崎産、静岡産の残量が少なかったことから、月間を通して堅調に推移し、大幅な安値で推移した前年を8割近く上回り、平年を1割近く上回った。</p>
	 たまねぎ	<p>兵庫産を中心に佐賀産などの入荷があった。兵庫産の作付面積は前年並みで、平年より降雨が多く大玉傾向であった。一部病害が散見されるが大きな影響はない。佐賀産の作付面積は前年並みで、2Lの比率が高く、大玉で玉の揃いも良く順調だが、降雨の影響により傷みが散見される。北海道産は生育順調でやや前進した。中国産の輸入は前年を3割以上下回る。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年を1割強下回った。</p> <p>価格は大幅な高値で推移した前年を2割以上下回り、平年をやや上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万6488トン、前年同月比

102.5%、価格は1キログラム当たり244円、
同108.4%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(7月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	36,488	102.5	97.1	244	108.4	105.7	238	246	247
だいこん	3,039	124.9	106.1	87	66.4	84.7	103	83	74
にんじん	2,273	111.4	103.1	146	83.9	89.5	136	151	151
はくさい	2,630	93.2	94.2	78	125.8	103.5	76	76	83
キャベツ類	4,822	93.1	89.6	106	123.3	123.9	115	116	92
ほうれんそう	310	97.0	80.2	746	102.1	107.5	663	756	819
ねぎ	636	108.9	111.5	488	102.3	103.4	506	522	449
レタス類	2,262	94.3	96.1	126	114.5	91.5	121	126	131
きゅうり	1,957	106.4	113.0	308	117.1	104.1	301	306	315
なす	1,008	101.0	103.2	331	122.1	104.9	318	341	337
トマト	2,240	108.0	101.1	360	109.1	108.1	350	364	364
ピーマン	656	119.7	115.6	442	125.6	109.1	500	428	413
さといも	29	88.3	69.4	527	150.6	119.4	752	587	374
ばれいしょ	1,777	102.9	83.1	171	172.7	101.3	161	181	173
たまねぎ	4,270	119.5	96.5	113	71.1	99.5	110	114	115

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>北海道産を中心に青森産や岐阜産も主体となる入荷であった。各産地とも気温が高く、生育が良好で、産地出荷量も多く、全旬を通じて潤沢な入荷が続いた。北海道産は月の前半の入荷が多く、月間では前年を大幅に上回った。岐阜産も全旬とも入荷量が多く、月間では前年を大幅に上回った。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>降雨や高温の影響により品質低下品が多くみられ、価格は伸び悩み、旬を追うごとに下落を続けた。北海道産は月の後半は前年の半値ほどの価格にまで落ち込んだ。月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	にんじん 	<p>青森産と北海道産が主体となり、月の前半は和歌山産の残量入荷もあった。上旬は好天の日が多く生育が順調で産地出荷量も多く、青森産は前年の2倍以上、北海道産も前年をかなり上回る入荷量であったが、中旬には曇りや降雨の日が多くなり、品質低下品が多くみられたことで減少した。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をやや上回った。</p> <p>上旬から中旬にかけての悪天候の影響により品質低下品が目立ち、価格は伸び悩んだ。中旬以降は品薄感から上伸し、下旬には再び好天となり入荷は回復したが、品質低下品が多いことにより価格は伸びず、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産が中心となる入荷であった。7月に入り入荷増となる見込みであったが、6月上旬の豪雨の影響により根傷みを起こしているものも多くみられ、中旬以降は干ばつが続いたことで生育状況が悪く、産地出荷量も少ない状況が続いた。上中旬は入荷量が少なく、下旬には微増傾向となったが前年を下回った。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>需要期ではない中でも絶対量不足から高値推移となり、下旬に上伸した。月間では前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>群馬産を中心に長野産も主体となり、九州産などの入荷もあった。5月までの初期成育時の気温が低く、6月上旬には豪雨が降ったことにより長野の主産地である佐久地区などで生育遅れが生じ、産地出荷量が少ない状況が続いた。群馬産は旬を追うごとに増加したが伸び悩み、月間では前年をやや下回った。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、不足感から高値推移となり、下旬には少し下がったが、月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>岐阜産が中心となる入荷であった。気温高で生育不良となり、旬を追うごとに減少した。前年も入荷量が少なかったため、上中旬は前年をかなり上回ったが、下旬は大幅に下回った。月間全体でも前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は入荷減少に伴って旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>茨城産を中心として鳥取産や北海道産も主体となる入荷であった。茨城産は潤沢な出荷を続け、全旬とも入荷量は多く、月間では前年を大きく上回った。北海道産と長野産が下旬にスタートして順調な入荷となり、全体では下旬は前年を大幅に上回った。月間全体でも前年をかなり上回った。</p> <p>入荷量が多い中でも価格は安定推移した。全体の価格は上中旬は前年並みで、下旬に下回ったが月間では前年をやや下回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産が中心となり、香川産や高知産、近郊の大阪産や奈良産などの入荷もあった。各産地とも気温高の影響により生育不良となり、梅雨明け後の中旬以降には干ばつ状態が続き、産地出荷量は少ない状況が続いた。月間全体では前年をやや下回った。</p> <p>一定の需要があるため、不足感から価格は高値推移となった。月間全体では前年を上回った。</p>
	レタス類 	<p>玉レタスは長野産を中心とする入荷であった。干ばつにより産地出荷量が少なく、入荷量は全旬とも伸び悩んだ。サニーレタスも長野産が中心の入荷となり、生育順調で産地出荷量も多く、全旬を通じて潤沢な入荷を続けた。月間では前年を大幅に上回った。リーフレタスも長野産が中心となり、生育順調で産地出荷量が多く潤沢な入荷が続き、旬を追うごとに入荷増となった。レタス類全体では前年、平年ともやや下回った。</p> <p>玉レタスは品薄感から高値推移となり、月間で前年を上回った。サニーレタスは量販店からの発注も多く、引き合いが強いことから高値推移した。リーフレタスは加工筋からの発注が少なく、荷動きが悪かったことから安値推移となった。レタス類全体では前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度下回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>主力の福島産を中心として、長野産の入荷もあった。福島産は生育が良好で順調な入荷を続け、旬を追うごとに入荷増となった。月間では前年を大幅に上回った。宮崎産は上旬まで残量入荷があったが、切り上がりが早く、前年を大きく下回るに留まった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>量販店の特売需要が多く、加えてコロナ禍が明けて復活した祭りの屋台需要が多く、引き合いが強い状況が続いた。価格は、月間では前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p>
	なす 	<p>千両系で主体となったのは大阪産、群馬産、京都産、奈良産などのこの時期の主産地で、長なすは愛媛産が中心となった。大阪産は全旬とも潤沢な入荷を続けるも、作期は終盤で旬を追うごとに減少した。群馬産と茨城産の入荷量が多く、共に前年の2倍以上となった。愛媛産の長なすは出遅れ気味で上中旬は伸び悩み、下旬に回復傾向となったが、月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。</p> <p>量販店を始めとして一定の需要があり、価格は高値安定で推移した。月間では前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p>
	トマト 	<p>主力の岐阜産を中心に愛知産や石川産の残量入荷や、熊本産などの入荷もあった。岐阜産や熊本産は生育が順調で旬を追うごとに増加した。愛知産は終盤ながらも順調な入荷となった。月間では岐阜産は前年をかなり上回り、熊本産は前年を大きく上回った。全体でも前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>気温高から量販店を中心に需要が高く、順調な販売を続け、価格も高値安定で推移した。月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>
	ピーマン 	<p>主力の宮崎産を中心に、各産地から入荷があった。九州産は上旬から中旬にかけての大雨の影響により、月の前半は入荷量が伸び悩んだ。各産地とも梅雨明け後の下旬に増加し、月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>販売も好調で、入荷増にともなう旬を追うごとに価格は下落傾向も、月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>宮崎産が主体となり、上中旬までは鹿児島産の離島ものも入荷があった。宮崎産は出荷が早く前年の2倍以上となったが、鹿児島産は切り上がりが早く、前年の2割以下となった。前年に比べて産地からの希望価格が高いことから、荷動きは鈍く、また、気温高で売れ行きが悪いことにより積極的な集荷を行うことができなかったため、全体では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、輸入の中国産の入荷はなく国産だけとなったことも影響して、前年を5割以上上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は茨城産を中心に、上中旬は長崎産の残量入荷、下旬には北海道産もスタートした。茨城産は潤沢な入荷で旬を追うごとに増加した。北海道産は降雨の影響により腐りなどが出たため、本格的な入荷は8月以降にずれ込むこととなった。メークインは千葉産を中心に、上中旬は長崎産の残量入荷もあった。千葉産は潤沢で全旬とも前年の2倍以上であったが、長崎産は切り上がりが早く、作付け減少の影響もあり、前年を大きく下回った。ばれいしょ全体では前年をわずかに上回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は安値だった前年を7割以上上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産が中心となる入荷であった。豊作の大玉傾向で全旬とも入荷量が多く、月間でも前年を大幅に上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、極端な高値だった前年を3割程度下回り、平年をわずかに下回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした9月の見通し

7月上中旬の梅雨終盤に、北九州や秋田県を集中豪雨が襲い、九州産のピーク後半の物の切り上がりを早めた。特に長崎産のばれいしょが急減し、北海道産が始まるまで価格は高めに推移した。7月は産地が北に移動する時期であり、北海道産、東北産は干ばつ気味だが果菜類を中心に順調な始まりで、市場では物が無くて困るといった状況はない。

市場で仕入れている小売商からは、「売れていないのに市場価格は高い」との声も聞かれるが、青果店では、仕入れ値が高いからといって簡単に売値を上げることはできない。

9月は、8月の夏休み期間の比較的落ち着いた需要に区切りがつき、8月の盆前まで潤沢であった果菜類の出荷が減少すれば、価格高騰の場面も想定され、全体の価格は平年を上回ると予想される。

根菜類



だいこんは、北海道産（しべちや標茶）の現状は肥大よく仕上がっており、平年を上回る出荷となっている。7月に入り予想以上に順調で、豊作基調となっている。ただし7月末頃に36度以上の気温が1週間以上続き、その後の雨の降り方では軟腐の発生も心配される。作付面積は前年並みである。北海道産（ようてい）は7月としては多く出荷され、7月末には減少した。8月上旬から10日過ぎまで出荷は伸びず、盆前頃から増えると予想される。播種できなかった時期があるため、その影響として9月中旬の数量が伸びないと予想されるが、9月全体ではほぼ平年並みの出荷を予想している。青森産は現状出荷が続いており、盆明けも問題なく、11月初め頃までほぼ一定のペースで出荷されると予想される。秋だいこんの作付けは前年並みで、当面はLサイズ中心と予想しているが、小ぶりに仕上がる可能性もある。

にんじんは、北海道産（斜里）の現状は高温と雨の影響により歩留まりが悪く、例年の70～80%の出荷となっている。例年の場合、盆明けから9月をピークに10月までの出荷となる

が、前年割れする可能性がある。北海道産（美幌）は8月4日の段階ではまだ降雨はないが、播種時期の天候や被覆したかどうかによって、肥大にばらつきが大きい。9月中旬まではほぼ現状と同程度で推移すると予想され、下旬は蒔き直した影響により少なくなると予想している。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産の現状は平年並みの出荷となっており、夕方の雨が適度にあり生育に目立った問題はない。8～9月は最大のピーク時期となり、8玉サイズを中心に平年並みの動きが予想される。岩手産は6月の当初は霜の影響により少なめの出荷となったが、その後の好天もあって回復した。しかし7月末の高温と干ばつにより生育は停滞している。7月中旬に秋田県に豪雨があったが、岩手県内はそれほど降らず、この生育停滞は8月中旬まで続くと予想している。その後9月初めにかけて回復するが、現在定植した物が干ばつと高温により活着不良となれば、9月下旬の出荷に影響が出ることが心配される。9月としては前年を上回ることなく、やや少なくなると予想している。

はくさいは、長野産の現状は干ばつが続いており、小ぶりで例年の半分程度の出荷となっている。通常盆明けの8月20日頃までが年間で最も少なく、その後徐々に増えるが、適度の降雨があれば8月下旬から10月まで通常ペースで出荷できると予想される。ゲリラ豪雨で泥はねが付くと傷みの原因となり、雨が降り過ぎると根傷みの可能性もある。

ほうれんそうは、群馬産は高温の影響により伸びが止まり、現状の出荷は少なめである。8月に入り回復に向かい、8月下旬には再び減ると予想される。播種作業は問題なく続いており、9月としては例年並みの出荷と予想される。栃木産の現状は、気温が高く生育は停滞気味である。発芽がやや不安定で、8月末から9月の出荷が例年よりも少なくなる可能性がある。標高が高くても例年よりも暑い時間が長く続き、徐々に生育状態が悪くなってきている。岩手産の現状は猛暑の影響により生育は遅めである。そのため例年の80%程度の出荷と少なめであ

る。盆明けに気温が例年並みに下がれば、回復に向かうと予想している。作付けは若干減少しているが、9月は例年並みの出荷を予想している。

ねぎは、北海道産は9～10月がピークと予想される。ALサイズを中心に作柄は良好である。作付けは微増であるが、引き続き平年並みの出荷を予想している。青森産の現状は走り物の出荷となっているが、盆明け頃からピークとなり10月まで続くと予想される。最初は暑さの影響により細物が多いが、9月に入り2Lサイズが中心となると予想される。作付けは前年並みである。

レタスは、長野産の現状は標高1300メートル地帯からの出荷であり、ほぼ平年並みの動きが続いている。盆明けから9月は標高1200メートル地帯からの出荷となり、定植も問題なく行われていることから平年並みを予想している。群馬産は7～8月の盆前にかけて順調に出荷されると予想している。8月下旬以降は、雨が少なくなることにより現在定植されている分の今後が心配されるため、9月の出荷は例年を下回ると予想している。

果菜類



きゅうりは、福島産のこの時期は施設物と露地物が半々の状況であるが、露地物に例年のような出荷量の増加がなくなっている。暑さにより生育が停滞していることもあるが、湿度が低いため枝が出にくい影響もある。盆頃にはピークがきて、その後9月には減りながら推移すると予想される。台風による豪雨がなければ、極端に減少することはないと予想している。宮城産の9月は抑制物が中心となるが、現状は例年より実の付き方が弱い。8月下旬から9月上旬にかけてピークが来て、その後9月下旬後半に再びピークが来ると予想される。猛暑の影響により例年と違う出荷パターンになると予想される。群馬産は9月に入って生産者の出荷が揃い、抑制物が本格的に始まると予想される。彼岸過ぎに増え始めるが、7～8月の高温の影響が残り山谷のある出荷が予想される。作付けは前年並みである。

なすは、栃木産は露地中心の出荷だが、現状は成りが悪く、90%程度の出荷と前年を下回っている。盆明け頃から若干増えるが、結実しないなどの状況が見られ9月は前年を下回ると予想される。露地物の最終は10月上旬となり、9月は減りながら推移すると予想される。

トマトは、北海道産は現状までは順調で前年並みの出荷となっており、続く8～9月についても順調で盆頃にピークを迎えると予想される。天候次第であるが、9月は前年を上回る出荷を期待している。青森産の現状は高温の影響により、2段同時に着色するなど出荷のピークに入っている。軟化玉の混入も報告されている。盆前に出荷は少なくなり、9月には平年並みと予想している。茨城産の抑制物は8月中旬から始まると予想され、高温の影響はない。品種は「りんか」と「モーニング」で、L・Mサイズ中心と予想される。作付けはほぼ前年並みである。

ミニトマトは、北海道産の現状は高温の影響により例年の120～130%程度の出荷となっているが、令和3年ほどの量ではない。この状況はしばらく続くが、盆明けから9月は若干少なめの出荷が予想される。茨城産は8月に入って抑制物となり、品種は「サンチェリーピュア」で作付けは微増である。当面のピークは9～10月と予想される。

ピーマンは、岩手産の現状は、暑さと降雨の少なさにより露地物が伸び悩んでおり、通常であればこの時期から数量が増えて盆頃にピークを迎えるが、8月いっぱい横ばいで推移すると予想される。9月も同様の展開で、平年を下回る出荷と予想される。茨城産の秋ピーマンは一部始まっているが、9月に入ってから本格化すると予想される。ピークは例年と同様に10～11月である。作付けは前年並みで、品種は「みおぎ」中心に「京鈴」である。



土物類

さといもは、静岡産の「石川小芋」は盆前に1度出荷され、本格的には8月20日からと予想される。試し掘りでは特段気象の影響を受けていない。今後の天候に大きく左右されるが、大きなピークはなく、特に業務需要（きぬかつ

ぎ)に対応した出荷が続くと予想される。

ばれいしょは、北海道産(ようてい)の品種「とうや」の収穫が8月4日から始まった。「男爵」の収穫は盆明け頃からで、9月に入り出荷がピークとなると予想される。「男爵」は肥大がやや悪く、平年作を下回ると予想している。「とうや」は9月いっぱいの出荷となり、平年を上回ると予想している。北海道産(北空知)は7月末頃から「とうや」が始まり、出荷のピークは盆明けから9月10日頃までと予想される。9月に入り「きたかむい」が始まり、同上旬中心の販売である。雨不足により平年を下回る出荷と予想される。9月後半からは種芋の収穫となる。北海道産(芽室)は、盆明けは「とうや」から始まり、「メイクイン」は9月上旬からと予想される。「メイクイン」は玉数も十分で、高温により株が倒れなければ豊作になると予想される。品種によっては干ばつの影響により小玉に仕上がる物もあると予想される。

たまねぎは、兵庫産の作柄は気象による問題もなく、平年並みである。9月の出荷物は通常の吊り玉タイプの物で、前年並みの出荷が予想される。中心サイズは例年よりも大玉傾向である。北海道産(岩見沢)は7月24日から始まったが、例年より早い。6~7月は干ばつ気味であったことから、やや平年を下回る可能性もある。ピークは8月中旬から9月である。北海道産(北みらい)の市場出荷は8月に入ってからで、作柄は適度の降雨もあることから平年をやや上回ると予想している。収穫作業は10月まで続くため、この先の変化も起き得るが、9月はLサイズを中心に平年を上回る出荷と予想している。



その他

ブロッコリーは、北海道産は麦の収穫による人手不足のため、現状8月に入って出荷は少なめになっている。それでも盆を境に増えて、9月に入りピークを迎えると予想される。現状の高温干ばつの中での定植作業に苦労しており、場合によっては不作気味で終わる可能性もある。10月いっぱいまで出荷できるが、作付けは前年の90%と減っており、9月は量的には

前年を下回ると予想している。青森産は秋作となり、作付けは前年より増えている。定植が遅れ気味で9月の出荷は前年を下回ると予想され、10月の初め頃にピークを迎えると予想される。

かぼちゃは、北海道産(岩見沢)の現状は施設物が終わり、トンネル物と露地物が始まったところである。生育は順調で盆明けから9月がピークと予想される。品種は「みやこ」「味平」「銀世界」「坊ちゃん」であるが、全般的に干ばつ傾向によりやや小ぶりである。北海道産(きたはるか)の走りの物は9月10日前後から始まるが、本格的な出荷開始は9月下旬からと予想される。現状は着果し始めた段階であり、大きな気象災害はなく、特別干ばつの影響もない。作付けは若干減っている。

スイートコーンは、北海道産は現状は少量ではあるが出荷は始まっており、本格的には盆前から9月中下旬までと予想される。生育は順調で、気温が高く前倒し気味である。品種は「味来」と「恵味」であり、全体の作付けは若干減少している。

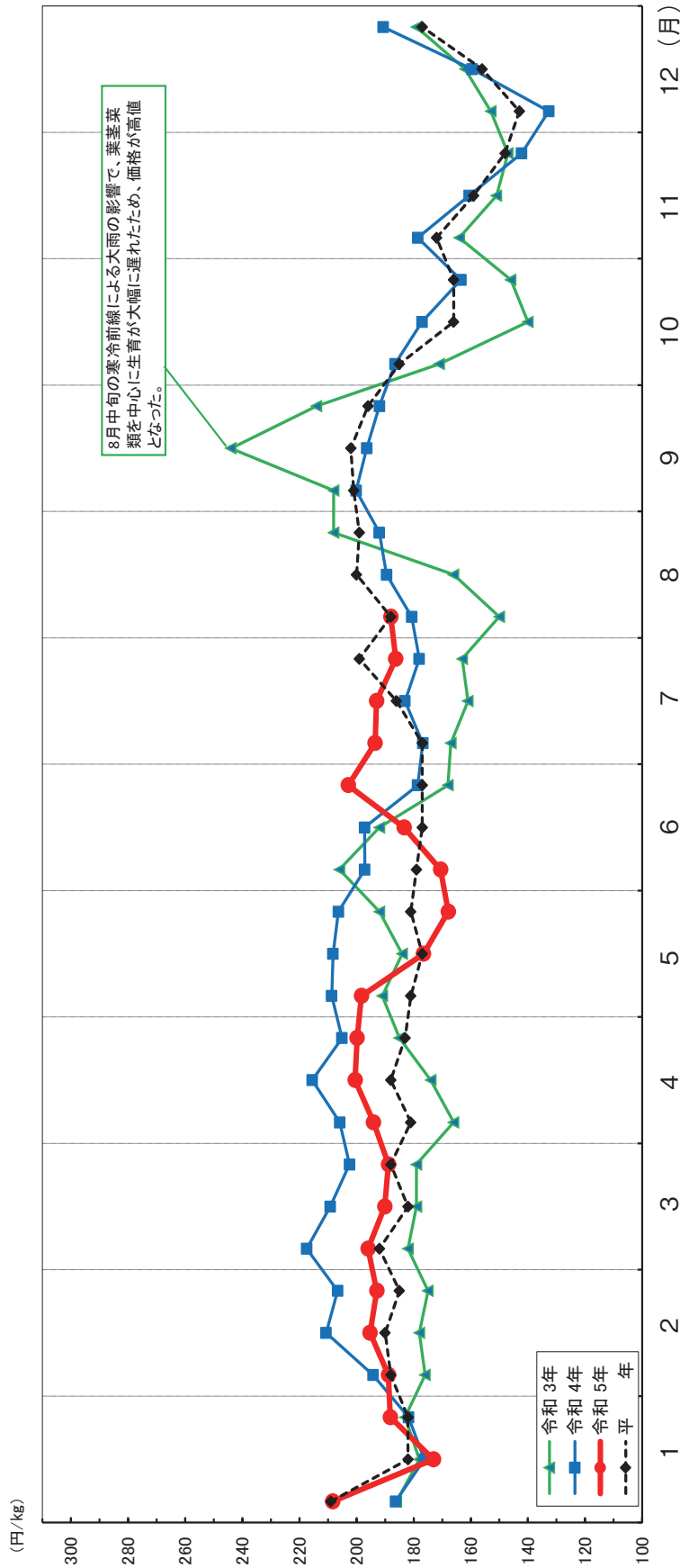
いんげんは、福島産のピークは9月となり、特に下旬に多く出荷されると予想される。平蒔^{ひらぎ}の物が増えており、現状は生育順調である。

かんしょは、徳島産の現状は早い物は始まっており、収穫は平年並みのペースである。猛暑ではあるが、降雨もあるため問題はない。昨年は少雨によりかえって肥大が早まり、裂果も見られた。7~8月は収穫作業に注力し、出荷は9月に入ってから本格化し、9月としては前年を下回ると予想している。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

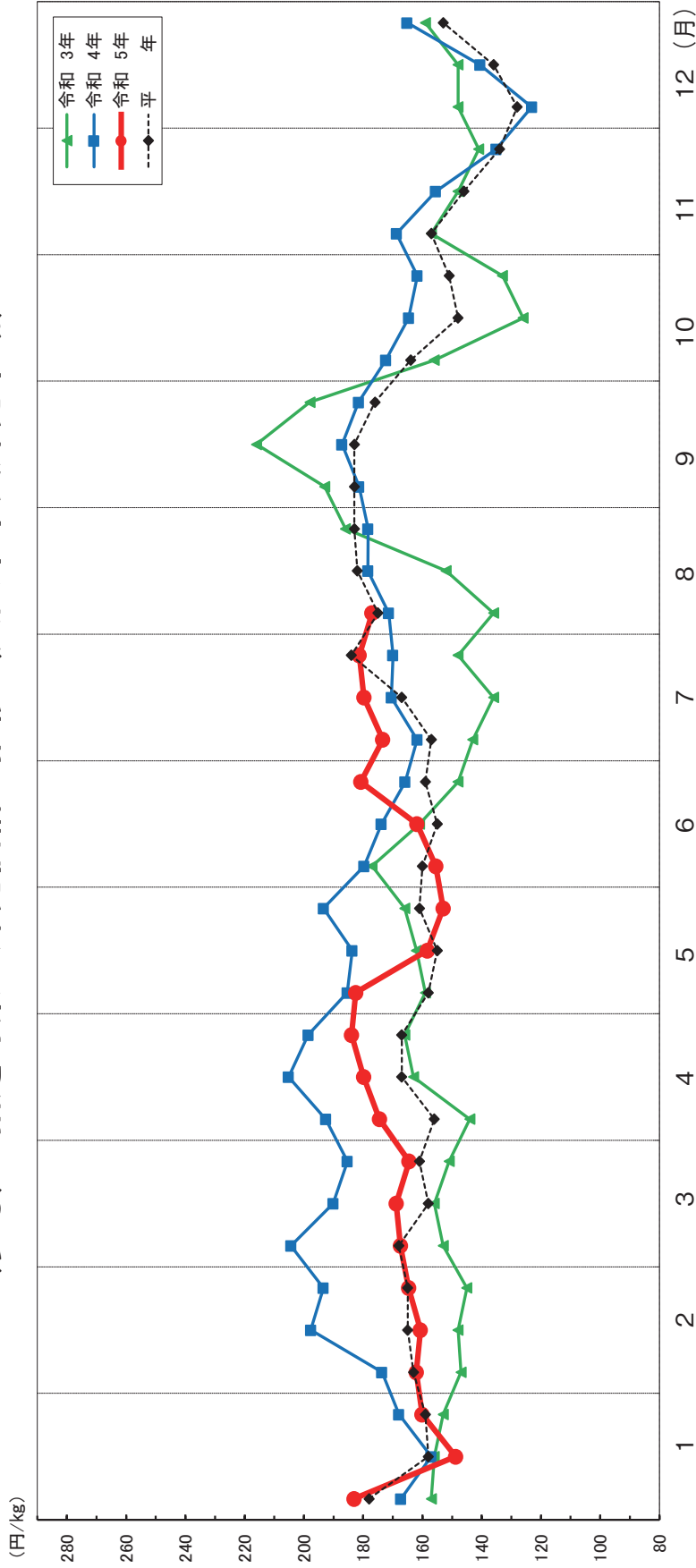
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月																
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬															
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179		
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	200	187	177	163	179	161	142	133	160	191		
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188																	
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177				

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬												
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159			
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177														
平 年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。